



明治大学校友会

2016年3月31日発行

国分寺地域支部 会報第8号

編集 同支部編集部会
発行 国分寺地域支部



絆を深めた「新年会」

1月23日（土）、国分寺地域支部の「新年会」が、これまでの国分寺駅前から場所を移し、恋ヶ窪の「JA 東京むさし国分寺支店ホール」において開催されました。

39名の参加者があり、今回初めて新年会に出席された方の紹介や各種行事の報告等があり、時間の過ぎるのを忘れるぐらいのあつという間の楽しい2時間の懇親会でした。

今年、ご参加いただけなかった皆様も、来年は、是非ご参加下さい。





釣りと一口に言っても、千差万別であります。川釣り、海釣り、と分け方にもいろいろですが、今回は、私の釣り歴の一端を述べることにします。私の出生地は、広島県北部の、江の川の上流です。この川は、県北備後の国、三次市で、三本の川（馬洗川、西城川、可愛川）の清流を一つに集めて、中国山脈を下り、島根県江津市の日本海に注ぐ、全長 194 km の日本で 12 番目の大きな川です。私は、物心付いたころから、この川で遊び、夏は殆ど毎日泳いだり、魚を追いかけて大きくなつた様に思います。

この川は、魚の種類も多く、鮎を始め、鯉、鮒、鰻、鮎、毛蟹と、秋には、鮭も日本海から遡上して来ます。鮭は、今も昔より数は少ないが、遡上しています。これらの魚の獲り方は、千差万別で、この地方独特なものもあり、長くなるのでここでは省略いたします。こんなことを言うと、いかにも恵まれた平和な子供時代だったように見えますが、私は、終戦の時は、10 歳でした。育ち盛りをあの終戦後の食糧難の真最中に過ごし、それこそ魚釣りではなく、魚獲りで獲ってきた魚は、全て食べると言う食卓のオカズ釣りだった様に思います。そんな青春時代を過し、地元の吉田高校（この高校は、「三本の矢の教え」で有名な毛利元就の郡山城の麓にある。）を出て、上京しました。私の人生の大半を、釣りを趣味の 1 つとして来ましたが、唯、この学生時代の 4 年間だけ、釣りをしない期間がありました。

大学を卒業し、絶縁曲折しながら就職をしました。釣りのことは忘れていた・・・が、入社した会社に「釣り部」があつた

のです。また、会社の所属する業界の組合にも「釣り部」があり、レクレーションを兼ねた釣り大会等をやっていたのです。文字通り、「水を得た魚」の如く入部しました。この釣り部で、関東沿岸の釣り場で、いろいろな魚を釣りに行きました。しかし、大勢での釣りは、大体キス、小アジ等の雑魚ばかりで、そのうち、段々と欲が出てきて、大物を目指すようになり、必然的に、竿にもリールにも、その他船代等にも負担が嵩み、同行の仲間もだんだん少くなり、40 代半ば頃からは、単独釣行が多くなりました。釣り場所も関東沿岸一帯から、最近では相模湾を中心とした釣り場が殆どで、鰐、稚鰐、メジ鮪、キハダ鮪、鯵等を季節に合わせて獲っています。小型の業務用冷凍庫（マイナス 60℃）に放り込んでおけば、年中「オカズ」の途切れることは殆どありません。

魚獲りを生業としない私の様な釣り人にとって思うことは、魚を獲ることだけなら、千年も昔の原始人がやっていた事と同じで、又、銃や機関銃のある時代に、弓矢を楽しむようなものです。

しかし、釣りの良いところは、釣りのマナーや秩序を守りながら、一竿の先に全神経を集中させて、魚がかかつたら格闘技にも劣らぬ体力を使って、船に獲物を取り込むという一連の動作は、私にとって、何物にも代え難い楽しみです。釣りは、「ヘラに始まって、ヘラに終わる。」ということを耳にしますが、私の釣りは、そんな高尚なものではなく、あの終戦後の食糧難時代の癖で、今なお、オカズ釣りに始まり、オカズ釣りに終わろうとしています。



捲土重来－紫紺の櫂・紫紺のジャージを再び－

明治大学ラグビー部は、昨年 12 月 6 日（日）秩父宮ラグビー場で行われた関東大学ラグビー対抗戦で早稲田大学と対戦、勝利し、帝京大学と同率で 3 年ぶりの対抗戦優勝を飾りました。しかし、年初の大学選手権では、準決勝で惜しくも東海大学に敗退。

一方、箱根駅伝は、前年 4 位で大いに期待していましたが、残念ながらシード権も失ってしまう結果でした。今秋行われる昭和記念公園の予選会（10 月 15 日（土））に期待しましょう。

「捲土重来」、箱根で紫紺の櫂が繋がり、秩父宮ラグビー場で紫紺のジャージが舞うよう、今年は、国分寺地域支部の皆様も応援に出かけようではありませんか。





明大を卒業して45年、(株)丸井に30年、ファンケルに4年、国分寺でコレクション・ギャラリー自営11年、思えば、我が人生今日まで流通業。今になって改めて経済学科を専攻して良かった、実に役立っているのである。この30年間、世界中の流通業（小売業）を見てきた。アメリカ・ヨーロッパ・アジア、何処の国も30年前とは變って来ている。ここ1~2年もフランスのモンマルトルの丘へ行って見たら、昔の素敵な店が無くなっている。その後にスターバックスが出来ていた。また、イタリアのミラノに行ったら昔の楽しい土産物屋がマクドナルドになっていた、そして、ロンドンのステッキ屋さんで、年を取った時にステッキを買いたいと楽しみにして行ったところ、たった1軒しか見つからなかった。ここもアメリカ資本のファーストフードの店が目立っており、昔の良きロンドンではないのだ。日本と同様どこの国も没個性・同質化・効率優先の店ばかりである。資本主義の大量生産、大量販売が主になっている。ただ金さえ儲かれば良い、更に昨今では、倫理観も欠落しつつある。これに拍車を掛けるのが、インターネット（以下、「ネット」と言う。）の急速な普及がある。店に行かなくても自宅に商品が届けられる。小生が(株)丸井を退職した17年前、日本全国の百貨店の売上は、約10兆円、ところが今年は、5兆円台と半減している。これは15年位前からファッショントレンドは、ユニクロ・しまむら、家電やカメラは、ヤマダ電器・ヨドバシカメラ、家具はニトリや島忠、そして雑貨に至っては、ダイソー・キャンドゥ等々の百円雑貨、更には、美術館や博物館等の文化事業も、全国に結構な数がある。従って、百貨店は、今や三十貨店位の商売しか商っていないのである。これは元々、百貨店自身が売れて儲かるファッショントレンドを中心品

揃えをしてしまった結果でもある。つまり、効率を追いかげ、効果（文化・拘り）を切り捨ててしまい、生活必需品に絞り過ぎ、スーパーに近い商売をしてしまったところにある。そこへネットの楽天・ヤフー・アマゾンその他いろいろ。昨年の12月に、(株)米八の顧問を務めている事から、新宿地区の各百貨店の食品売場に出店している米八の巡回指導を行った時、あることに気づかされた。流石に年末の新宿、多くの買物客？ところが何故かあまり百貨店の手提袋を持っていないのである。考えてみると、百貨店やヤマダ電器で価格とカタログをもらって帰り、家でネットでの注文と言う事なのか？それから、1ヵ月後、日経流通新聞にこの現象を捉えた記事が掲載されていた。ブランドで型番が判れば、ネットで一番安いところで買うというのが、今時の消費行動になってしまった。この勢いは、今年も加速するだろう。さて、国分寺でコレクション・ギャラリーをスタートさせて12年目、当店でも同じ現象が出てきている。ただ、違うのは、当店でしか置いていない品物・アート作品・直輸入品・日々拘りの骨董を中心に売っているので、充分に戦っている。しかしながら、私もそろそろ年なので、今年6月で閉店を決めている。只今、後継者を募集している。後継者の条件は、リアル店+ネットつまりオムニチャネルのビジネスモデルでなければ、もう戦えないであろう。これから益々少子高齢化が進み、また天候不順で人が外に出てこなくなる時代、駅前商店街はチェーン店の飲食店ばかり、どの地域も地元の人にはつまらない店だけ、それなら自宅に居ながらネットの方が時間も交通費も掛からず楽なのである。資本主義ケインズ理論“消費は美德”しかし、消費の仕方までは唱えていない。世の中、効率性と利便性ばかりを追求、その結果、どうやら今、日本人に不足しているものは、お金ではなく、文化や情緒、人間の心の豊かさで、その心の余裕の不足が生じ始めている。国分寺もその街の1つになりつつある。

始皇帝が夢見た「永遠の世界」へ



紀元前221年、秦国として、中国大陸を初めて統一し、自らも、最初の皇帝を名乗った「始皇帝」。始皇帝は、巨大な陵墓を造らせ、その近くに約8千体もの陶製軍団「兵馬俑」を埋めさせました。

この「兵馬俑」は、昭和49年に発見され、20世紀の考古学における最大の発見の1つと言われています。

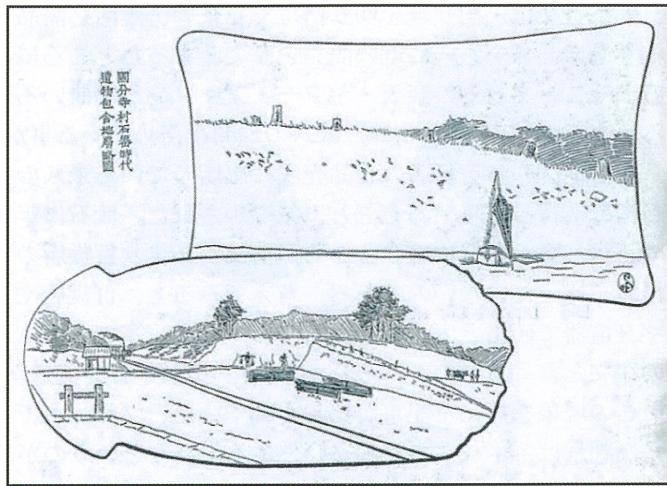
東京国立博物館で開催された「始皇帝と大兵馬俑」展では、この他に始皇帝と秦王朝にまつわる貴重な文物も一堂に集められていました。

1月13日（水）、国分寺地域支部では、8名が参加し、今から2,200年前の始皇帝が夢見た圧巻の「永遠の世界」に触れてきました。



連載 わがまち歴史探訪 一国分寺市の3万5千年—③

本町(国分寺村石器時代)遺跡 立春前の爽やかな或る日、学史上著名な縄文時代遺跡を訪ねた。駅前再開発工事で大きな穴がボッカリと空いた国分寺駅北口の雑踏を抜ける。



上図は、明治27年（1894）9月発行の『東京人類学会雑誌』に掲載された論文中の挿図。日本考古学の夜明けと云われるモースによる大森貝塚の発掘から21年後。東京人類学会は、東京大学理学部を中心として明治17年（1884）に結成された人類学会で、後の考古学・民族学・民俗学なども包含しており、土器・石器・遺跡なども数多く報告された。

論文のタイトルは、「武藏国北多摩郡国分寺村石器時代遺跡」。著者は、鳥居龍蔵と大野延太郎の連名。

鳥居龍蔵は、8年前に、結成されたばかりの東京人類学会に入会していて、その縁で前年の明治26年（1893）に、東京大学理学部人類学教室の標本整理係に採用されている。この年24歳。後に、アジアや日本国内各地で調査を行い、明治38年（1905）に東京大学理学部の講師、大正11年（1922）に助教授となっている。

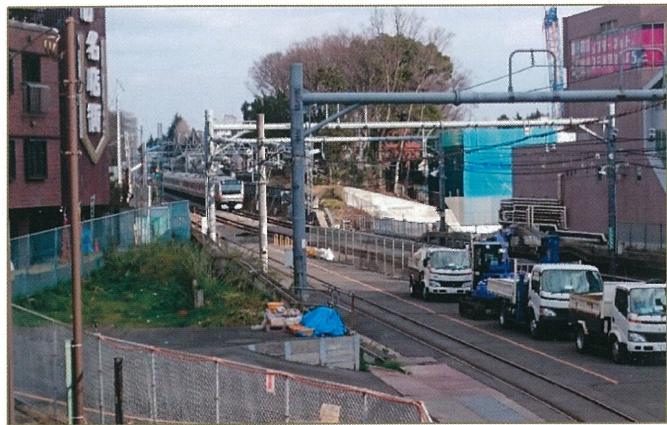
大野延太郎は、同教室に図工として採用されていて、この年、31歳。日本の人類学の草分けである坪井正五郎の研究に協力して、明治35年（1902）に助手となる。文中のスケッチは、大野によるが、精緻な図を数多く残している点が学史上評価されている。

因みに、上図のそれぞれの枠は、縄文時代後晩期に多く出土する縄文人の祈りの道具である土版・岩版（上）と石棒（下）の形で、大野の得意とした研究分野。図工としてのセンスが光る。

鳥居は、前年9月の多摩川沿岸遺跡探求旅行で、国分寺駅を降りて武藏国分寺跡に向かって、踏切を渡った折に、この遺跡を実見していた。翌明治27年（1894）4月5日、再び、同旅行の際、深大寺よりここに来て調査を行ったのである。

上図（下）で、単線の軌道を小金井駅からやってくる汽車が煙を上げている。甲武鉄道（今日の中央線）は、4年前に新宿・立川間で営業開始された。線路脇には、レールが積まれている。鉄道と交差する府中新道路（現在の国分寺街道）の建設工事が行われていて、もっこを担ぐ作業員などがある。

作業員の脇の道路切り通しと、レールが積んである所の脇は地層が露出していて、それぞれの上部に縄文時代（当時は石器時代といった）の土器や石器などが包含されていて、同じ丘の続きが道路工事により分断されたものとの確に理解した。



中央線国分寺駅の東側。昔、踏切があった北口自転車駐車場あたりから遺跡を遠望する。下り電車の脇の丘に、林が僅かに残る。

手前右手はハタヤ第1ビル。左手は千成ホテルで、建設前の発掘調査で縄文時代中期（5,000年前）の住居跡が6軒発見された。

左上図のタイトルには「国分寺村石器時代遺物包含地層略図」とあり、翌明治28年（1895）6月発行号まで数回に及んでこの問題を追求した。そして、数十センチの土に覆われて当時の地盤上から動かないで縄文時代遺物を包含する地層を「遺物包含層」、開墾などで地表に遺物が散布して地下の遺跡の存在を示している場所を「遺物散列地」と呼ぶとして、遺跡のあり方を明確にした（下図）。現在でも、「遺物包含層」はそのまま考古学用語として用いられている。



本多谷・殿ヶ谷戸谷 このあたり、土地の起伏が激しく、坂が多い。路地をつぶさに歩くと、その向きがさまざま、複雑だ。

論文中には、古くは「ひよどり越」あるいは「とのが谷（やつ）」といわれた場所とある。「殿ヶ谷戸」の地名は、都立庭園の名前などに残っているが、庭園の東側から北へ入る谷が殿ヶ谷戸谷と呼ばれる。この谷は中央線付近で西へ大きく曲がって駅全体がすっぽり入っていて、西武多摩湖線のホーム付近まで続く。谷壁は緩やかだ。

一方、東経大南の信号あたりから北西に向かい、中央線ガード南の交差点あたりから北へ延び、本町一丁目交差点の西側を抜けて、二中・七小がすっぽり入る低い土地を造りだしているのが本多谷。遺跡付近では谷幅は狭く急崖だ。

この二つの谷は奥の幅が広く、出口が狭い。蛇行しながらガードの南付近で交差していて、複雑な地形を残した。南町二丁目の独立した三角形の高台（丸山と呼ばれる）をも造形した。そして、付近には湧水も各所にあって、旧石器時代から縄文時代の遺跡が多く分布しているのである。

120年後の今日、鳥居達が見た風景は大きく変貌しているが、写真に写る林は、左上図（下）で作業員の向こうの切り通し上の林の残りだと思われる。手前の積んであるレール脇の地層は、大半が失われてしまっているようだ。（続く）

福田 信夫（昭49・文史地 考古学専攻）

「女子会」を開催しました



昨年12月26日(土)、女子会員だけの「女子会」を開催しました。国分寺地域支部からは5名、国立地域支部からは1名参加され、カラオケ等を行い、交

流を深めることができました。これからも、食事会やコンサート等を通じ、更なる絆を深めていきたいと思います。また、このようなネットワークの広がりを図り、新たな女子会員の加入に繋げていければと考えております。

ここで、ご参考まで、明治大学の女子学生等の現状について、ご説明させて頂きます。

明治大学の女子学生数は、30年前には、全学生数の11%でしたが、平成27年には、3人に1人（女子学生数は10,225名、全学生数の33.5%）と言う状況です。今や、キャンパスは、華やいでおります。こうしたなか、国分寺市在住の卒業生についても、女性の方が増えており、平成

27年4月現在で、全体の20%、220名が在住しております。しかし、現在の国分寺地域支部の女子会員は、僅か15名、今後、ますま

す女性卒業生が増えて行くなかで、新たな女性会員の入会促進が喫緊の課題でもあります。

ところで、今後の活動をしていくのに、名前があつた方が便利ではないかと言うことで、国分寺市の花「さつき」に因んで、「国分寺アザレアクラブ」と言う名称にしました。

この名前に負けない活動をしていきたいと思いますが、皆様のバックアップを切にお願い申し上げます。



「大餅つき大会」(国立地域支部主催)に参加して

昨年12月20日(日)、雲ひとつなく、晴れわたり、目の前には、一面菜の花が咲き乱れている国立市「城山さとのいえ」で、年末恒例の国立地域支部主催「大餅つき大会」が開催されました。国立地域支部を含め6地域支部66名、国分寺地域支部からは、17名が参加させていただきました。今年は、明治大学の現役相撲部の3名と、明治大学の学生さん男女合わせて12名、総勢15名の方にお手伝いをしていただきました。

相撲部員の絶妙な餅つきで、出来あがった「餅」は、最高の出来栄えでした。

毎年、私ども国分寺地域支部から多くの会員の方が参加させて顶いておりますが、この催しを開催するにあたり、事前の準備、そして後片付け等は、大変な汗と労力を要します。国立地域支部の土屋支部長はじめ国立地域支部の皆様には、深く感謝申し上げる次第です。



地域の福祉活動への寄付



国分寺地域支部は、社会貢献の一環として、このたび、地域の福祉活動に取り組んでいる社会福祉法人「国分寺市社会福祉協議会」に寄付を行いました。

1月 23日（土）開催の国分寺地域支部新年会において、ご寄付を募ったところ、出席された多数の皆様のご厚意によりまして、「21,820円」の寄付金が集まりました。

1月 25日（月）「国分寺市社会福祉協議会」にこの寄付金を届けてまいりました。

この度の会員の皆様のご厚意につまして、改めて深く感謝申し上げます。

訃報

国分寺地域支部幹事の戸嶋喜美代氏は、昨年12月26日に御逝去されました。享年82歳。戸嶋氏は、写真もプロ級の腕前で、会報編集部会編集委員を務め、会報に掲載する多くの写真を撮っていただきました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記一

少にして学べば、即ち壯にして為すことあり
壯にして学べば、即ち老いて衰えず
老いて学べば、即ち死して朽ちず

（幕末の儒学者、佐藤一斎「言志四録」）

人は、常に砥石が必要です。必ず切れなくなる時が来るものです。研がずとも大丈夫と思って振り回すのはいかがでしょうか。人の交流も多くの学びを提供してくれます。

今年も、国分寺地域支部では、いろいろな行事を行います。是非多くの会員の方々との交流を深めて頂きたく存じます。

（編集委員：山口研一、出渕恵介、佐々木一郎、高久みどり、芦田隼人）